

# 教育研究業績書

2020年10月27日

所属：共通教育部

資格：講師

氏名：G. C. デニソン

研究分野	研究内容のキーワード
Applied Linguistics (応用言語学), Second Language Development and Acquisition (第二言語取得), Language Assessment and Measurement (言語評価・測定), Vocabulary (語彙)	Language development, Language assessment, EFL Writing, EFL Vocabulary Learning and Instruction, Many-Facet Rasch Measurement
学位	最終学歴
修士 (M. S. Ed.)	Temple University, Graduate School of Education, TESOL 修士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. 遠隔授業でのアクティブラーニング	2020年4月2020年8月	外国語の授業では、学習と指導の中でコミュニケーションとディスカッションが最も重要だと言える。そのため、遠隔の環境でもアクティブな議論や意見交換を行う方法を見つける必要があった。グーグルの クラスルーム、チャット、ミーティングおよびマイクロソフトのフリップグリッドを組み合わせて活用し、学生がトピックについて話し合い、積極的に意見交換ができる環境を再現することができた。特に意見交換をフリップグリッドでするのが学生たちに好評だった。
2. チャレンジコースの英語合宿	2020年02月17日～2020年02月18日	英語チャレンジコースの学生のための2日間の英語合宿を中央キャンパスにおいて実施した。OG、現役、新入メンバーが参加し、語彙学習や実用的な会話力を中心にアクティブな研修となった。参加したメンバーの英語能力を向上させることだけではなく、ディスカッションしながら、kiva.orgを使い、途上国で融資を必要とする借り手を自ら選択ことなどを通じて、途上国支援の実験を経験した。国際理解や、途上国への興味を高める機会になったと考えられる。メンバーの間の「縦と横の絆」を強まる機会ともなった。(参加人数13名)
3. ピアアセスメント (相互評価)	2019年4月～現在	英語ライティング科目で実施。学生がルーブリックを使い、お互いに評価をする活動を積極的に導入した。学生が相手のライティングを向上させることだけではなく、自らの英語能力の成長を促すことにもつながったと考えられる。
4. チャレンジコースの英語合宿	2019年2月12日～2019年2月13日	英語チャレンジコースの学生のための一泊二日の英語合宿を丹嶺研修センターにおいて実施した。OG、現役、新入メンバーが参加し、語彙学習や実用的な会話力を中心にアクティブな研修となった。参加したメンバーの英語能力を向上させることだけではなく、メンバーの間の「縦と横の絆」を強まる機会となった。(参加人数10名)
5. ICTを使った自主的な語彙学習の導入	2018年04月～現在	共通教育の英語チャレンジコースで実施。Google Classroomを使い、学生が自分にとって一番大事だと感じる語彙を共有シートで記入し、授業でその語彙を使った活動を行なう。自主学習活動の一つとして学生が選んだ語彙から講師がクイズを作成し平常点に入れることになっている。
6. スピーキング・テストの導入	2017年04月～現在	スピーキング・リスニングが中心となる科目で実施。Transfer Appropriate Processing (TAP) の研究に基づいて筆記試験をより一層適切なスピーキング・テストの形に改善
7. ルーブリックの導入	2017年04月～現在	プレゼンテーション科目で実施。プレゼンテーションの授業にルーブリック評価を導入し、学生をグループ化しルーブリックを使いながら自分達のプレゼンテーションと一緒に考え、プレゼンテーション能力や英語能力の向上につながったと考えられる。
8. 授業におけるフォーカス・オン・フォーム法とインタラクション重視のアプローチの両立	2016年04月～現在	インタラクション (関わり合い) を英語学習の中心に置くため、授業においてもペアワーク、グループワーク、共同学習を多く取り入れた。同時に、このようなコミュニケーション重視の教授法は明示的な文法説明で支えられるべきであるという方針のもと、有用で実用的な文法説明を、それがコミュニケーション活動に必要なになった時点で提供するというアプローチを採用した (逆向フォーカス・オン・フォーム法)。その結果、スピーキングおよびライティングにおける表現の誤りの減少につながった。
9. グループ・プレゼンテーションの導入	2016年04月～現在	英語プレゼンテーションの科目で実施。共同学習を通してグループ・プレゼンテーションを取り入れたプロジェクトを実施。
10. チャット・ルームの設立	2014年04月～2016年03月	英語学習のあらゆる面でサポートを提供する「チャット・ルーム」の設立に携わった。生徒は会話や面接練習から文法説明まで、様々なニーズを持って自由にチャット

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
11. 多書 (Extensive Writing) の推進	2013年04月～2016年03月	・ルームを訪れ、学習意欲の向上につながったと考えられる。 ライティング能力を向上させるためにエクステンシブ・ライティングを積極的に授業に取り入れた。沢山書いてアウトプットすることにより、Words Per Minute (毎分語) の向上や長文がかけられるようになるなどの様子が見られた。
12. 授業外活動としての多読 (Extensive Reading) の推進	2012年09月～2016年03月	機会があるごとに多読教材に取り組むよう、生徒に指導した。適切な内容を持った質の高いインプットを大量に提供することにより、読解能力の向上が見られた。
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. Discussion Leader (ディスカッション・リーダー) の教材	2019年4月	英語コミュニケーションⅣの授業のために作成。学生がディスカッショングループのリーダーができるように独特な教材を作成した。それを使って学生が自らニュースの記事を選び、調査した上でディスカッション・クエスチョンや語彙の質問を作りグループ・ディスカッションを行った。英語能力や社会問題への興味を高める機会となった。
2. Discussion Roles (役割) の教材	2019年4月	英語チャレンジコースのGlobal Communication I・IIのために作成。グループ・ディスカッションがスムーズに進行させるように、学生の役割を決め、4種類のワークシート (Leader, Summarizer, Connector, Language Monitor) をディスカッションの準備や実施に使用した。ディスカッションごとに学生の役割が変わり、様々なディスカッション・スキルを練習する機会となった。
3. Kiva.org in the classroom	2019年2月	Kiva Microfunds (インターネットを介してマイクロファイナンスを行うNPO機関) を授業で用いるため独特な教材を作成し、その教材を使い、学生が途上国で融資を必要とする借り手をグループで選択し、融資までのプロセスを体験できる。
4. デジタルリテラシーの教材の活用	2018年9月	ICT for Everyday Lifeの授業を中心において、英語を通してパソコンやインターネットの安全で効率的な使い方 (デジタルリテラシー) を上達させるために自作のデジタル教材を導入した。強力なパスワードの作り方や、海外旅行の計画の立てるために海外のホームページの安全な使い方、様々な面で学生をデジタルリテラシーについて考えさせる機会となった。
5. ディスカッションスキル (Conversation Strategies) の教材の活用	2016年04月	ディスカッション・スキルを向上させるために論議を授業において頻繁に取り入れ、自作のカードや参考書を使ってゲーム感覚でディスカッション・スキル (Conversation Strategies) を活用した。その結果、会話能力の向上につながったと考えられる。
6. コンピューター利用語学学習 (CALL) の活用	2016年04月	語彙学習をより一層効率的にできるようにGoogle Docs やGoogle Sheetsを活用した。学生が参加し、自分たちが重要であると思う単語を選び、自分たちのためのリストを作成した。その結果、語彙学習意欲の向上が見られた。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		
1. 留学生のための講義の通訳	2019年7月9日	Study in Japan (SIJ) の留学プログラムにおいて、韓国、アメリカ、オーストラリア、台湾からの留学生が書道の授業で、書道の先生が教えたことを通訳 (和英) しながら学生に伝えた。異文化交流につながったと考えられる。
2. MFW I に出発する前の準備講座	2019年7月2日	本大学の学生がMukogawa Fort Wright Instituteの夏期英語留学に出発する前にアメリカ文化や英会話の基礎についての講座を開いた。講座があって学生の留学生活がより一層スムーズにできたと考えられる。
3. 「Successful Communication in Japan」の講義実施	2019年6月27日	Study in Japan (SIJ) の留学プログラムにおいて、韓国、アメリカ、オーストラリア、台湾からの留学生のために特別講義を実施した。留学生が特に悩む異文化のコミュニケーション問題について説明し、どうやってホストファミリーや地域の人達と上手くコミュニケーションが取れるように練習を行なった。学生の留学生活がよりスムーズにできたことにつながったと考えられる。
4. 学生の海外でのプレゼンテーションの支援	2019年6月	英語チャレンジコースの学生が海外で英語の発表をすることになって、抄録とプレゼンテーションの原稿を向上させるために努力した。
5. オーストラリアに出発する前の準備講座	2019年12月12日	本大学の学生が春期英語留学に出発する前にオーストラリア文化や英会話の基礎やホームステイ先に役立つ情報についての講座を開いた。
6. 留学生のための講義の通訳	2018年7月3日	Study in Japan (SIJ) の留学プログラムにおいて、アメリカとオーストラリアからの留学生が書道の授業で、書道の先生が教えたことを通訳 (和英) して学生に伝えた。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>4 その他</b>		
7. 「Successful Communication in Japan」の講義実施	2018年6月28日	。異文化交流につながったと考えられる。 Study in Japan (SIJ)の留学プログラムにおいて、アメリカとオーストラリアからの留学生のために特別講義を実施した。留学生が特に悩む異文化のコミュニケーション問題について説明し、どうやってホストファミリーや地域の人達と上手くコミュニケーションが取れるように練習を行なった。学生の留学生活がよりスムーズにできたことにつながったと考えられる。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 全日本柔道連盟公認柔道指導者C指導員認定	2013年04月01日～2016年03月31日	
2. International TEFL Teacher Training 認定 TEFL 資格証書	2012年01月11日	
3. 日本傳講道館柔道参段	2011年09月28日	
4. 日本語能力試験 (JLPT) Level N1 (最高レベル)	2011年01月30日	

<b>2 特許等</b>		
--------------	--	--

<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 特定非営利活動法人「篠山国際理解センター」の翻訳者	2009年04月～2016年03月	和英・英和翻訳や市民のための英会話教室などのボランティア活動を篠山国際理解センター (International Center of Understanding) において行なった。

<b>4 その他</b>		
1. Vocabulary Learning and Instruction: Proofreader (校正者)	2020年2月～現在	国際センターの職務上での書類、手紙、大学のホームページの内容などの翻訳や校正などを努力し続けている。  Extensive Reading in Japanのコラム「Recent Research in Extensive Reading and Listening」のコラムを維持し、エクステンシブリーディング (多読) とエクステンシブリスニング (多聞) に関連する最新の研究をまとめています。
2. 国際センターでの翻訳サポート	2018年4月～現在	
3. Journal of Extensive Reading: Reviewer (論文査読者)	2017年11月～現在	
4. Extensive Reading in Japan: Column Editor (コラム編集者)	2016年6月～現在	
5. Extensive Reading in Japan: Proofreader (校正者)	2016年6月～現在	
6. Vocabulary Education and Research Bulletin: Proofreader (校正者)	2015年10月～現在	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
<b>2 学位論文</b>				
<b>3 学術論文</b>				
1. Vocabulary learning using student-created class vocabulary lists (査読付)	共	2020年8月	Vocabulary Learning and Instruction, 9(2), 1-8.	G. Clint Denison & Imogen Custance この論文では、Class Vocabulary Lists (CVLs)の教育的根拠と、グーグルシートを用いた実装について説明する。CVLの活用で学生は協力し、自分たちにとって重要だと感じる語彙の「ノートブック」を構築することができる。学生(N = 53)のCVL選択は、頻繁度に基づいた単語リスト(BNC /COCA, NGSL, TSL)と比較して、選択された語彙の有用性を調べた。なお、AntConc と AntCorGen を使用し、構築された情報技術キーワード リストを情報学 CVL と比較して、学生が自分の分野に適した語彙を選択しているかどうかを調べた。結果は、語彙を選択する自律性を学生に与えると、学生は一般的にしても自分の分野にしても有用性の高い単語を選択することで、CVLは有益な方法であり、頻繁度に基づいた単語リストを補完するにも役立つかもしれない。
2. Examining the lexical profile and speaking skills of English L2 learners (査読付)	単	2019年03月	大阪女学院大学紀要、第15号、65-88.	本研究ではディスカッションコースの一環として実施されたスピーキングテストでのEFL大学生の語彙プロフィールと定型的文章の使用についてのパイロット調査を行った。このコースではディスカッションに適したアカデミックな語彙と定型的文章の明示的な指導および練習を通じて学習者の生産的な語

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
3. Activities for developing suprasegmental skills in Japanese learners of English (査読付)	単	2016年04月	Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 105, 165-187.	<p>彙や全体的なスピーキングスキルを養成することを目的としていた。結果は英語能力がすでに高い学習者であってもNGSL 3とNAWLの語彙の使用率が増加し、全体的に洗練された語彙プロファイルになった。加えて、DornyeiとThurrell (1994) の提案に基づく定型的な文章の明示的な指導と練習が確認チェックの実行などの会話ストラテジーの増加につながったと考える。</p> <p>英語の超分節的特徴は習得しにくいと言われているが集中的に練習することで向上させることができる。この論文では、超分節的特徴(スプラセグメンタル)を練習できる3つの活動について紹介する。一つ目はストレスとイントネーションに注目し、二つ目はリンキングに注目する。三つ目はポーズを使って考えをはっきり分けることを練習する。</p>
4. Course materials for Communication English III (査読付)	単	2016年04月	Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 104, 1-7.	<p>この論文では、今までほとんど生産的な活動が行われてこなかったリーディングコースにおいて、ディスカッションを通してmeaning-focused inputとmeaning-focused outputを取り入れた活動を紹介している。その上、アカデミックな語彙をより一層効率的に学習できるための教材を紹介する。</p>
5. A syllabus for the Practical English course (査読付)	単	2015年10月	Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 102, 86-95.	<p>この論文では、高校スーパーイングリッシュコースのプラクティカル・イングリッシュという授業のシラバスを提供する。このシラバスでは語彙学習に注目する一方で4技能フルエンシーに重点を置いている。シラバスの主な活動にはスピード・リーディング、スピード・ライティング、4/3/2スピーキング、単語テストなどが含まれている。</p>
6. Conjunction-based sentence combining to develop complexity in fluent writing (査読付)	単	2015年03月	Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 98, 63-75.	<p>外国語としての英語教育を数年間受けていても、複雑な文章が書けない学習者が多く存在し、さらに早く書こうとする際に短い文章や同じ文章を何度も繰り返すことで複雑な文章が書けていないという状況がある。この研究ではライティングの複雑性を増すセンテンス・コンバイニングという活動について調べた。高校1年のスーパーイングリッシュコース(N=53)の授業でセンテンス・コンバイニングの練習問題を順にやり、その結果対象者のライティングの複雑性(MLS、CPS)が上がった。その上、ライティングの速度(フルエンシー)にも微増が見られ、その研究結果やセンテンス・コンバイニングの練習問題について論じる。</p>
7. Fluency development through extensive writing	単	2014年10月	Proceedings of the 16th Annual Temple University Japan Campus Applied Linguistics Colloquium, 53-59.	<p>この論文では、中学校3年のスーパーイングリッシュコース(N=78)に取り組んだエクステンシブ・ライティング(多書)という活動について論じる。学生が自分のライティングの正確さに集中し過ぎ、長文が書けないという問題は珍しくない。その問題が解決できるようにエクステンシブ・ライティングを授業に導入した。学生がトピックを選び、7分間できるだけ速く長く書き続け、終わったら自分のチャートに記録し流暢性(フルエンシー)を向上するように試みた。研究の結果として、学生のライティング速度が徐々に上がったのを見られた。その上、エクステンシブ・ライティングがライティング・フルエンシーの向上やライティングに対する取り組み易さの向上には効率的な活動の一つであるかもしれない。</p>
8. Developing writing self-concept in the L2 classroom (査読付)	単	2014年08月	Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 94, 17-21.	<p>この論文では、セルフ・コンセプトという複雑な個人差の一つについて紹介する。なぜ、外国語の能力があるにも関わらず外国語に対する学習意欲がないというのはセルフ・コンセプトに基づいているかもしれない。学生のセルフ・コンセプトや学習意欲をどうやって向上させるかについて論じる。</p>

**その他**

<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
1. Using student-created class vocabulary lists	共	2020年11月17日(発表予定)	The 8th Annual JALT Vocabulary SIG Vocabulary and CALL Symposium (Online)	<p>G. Clint Denison and Imogen Custance. We describe the pedagogical basis for class vocabulary lists (CVLs) and their implementation using Google Sheets. CVLs allow students to collaborate and build "notebooks" of vocabulary they feel is important to learn. CVL choices of students (N = 53) were compared against frequency-based lists (BNC/COCA, NGSL, TSL) to determine the usefulness of the selected vocabulary. An information technology keyword list was constructed and compared against an informatics CVL to determine if those students were choosing field-appropriate vocabulary. Results suggest that when given autonomy to choose vocabulary, students generally select useful and relevant word</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1. 学会ゲストスピーカー				
				s for their contexts and that CVLs supplement frequency-based lists in beneficial ways.
2. 学会発表				
1. Measuring L2 listening self-efficacy: A mixed-methods validation study	共	2020年3月28日 (Conference cancelled)	Annual Conference of the American Association for Applied Linguistics (コロラド州、デンバー市、USA)	Brandon Kramer & <u>G. Clint Denison</u> This presentation provides mixed-method validation evidence for a 16-item survey to measure students' self-efficacy relative to L2 listening tasks. Using Messick's (1995) Construct Validity Criteria as a framework, a Rasch-based quantitative analysis of survey data (N = 185) was conducted along with semi-structured qualitative interviews to elucidate the sources of student responses (N = 6). The quantitative results indicate that the items showed a sufficient spread of difficulty, fit stochastically to the Rasch model, and formed a fundamentally unidimensional construct. The qualitative results suggest that this instrument accurately targets the intended construct and sheds light on the primary sources of L2 listening self-efficacy.
2. Vocabulary development and instruction using student-created lists	単	2019年5月11日	9th Annual Osaka JALT Back to School Conference (大阪女学院大学、大阪府大阪市)	(This poster was also presented at the 2019 AAA L Conference in Atlanta, GA) In this poster presentation, I discussed what current vocabulary research suggests is beneficial and necessary to include in student-created class vocabulary lists, while explaining a practical approach to their creation and integration with freely available frequency-based lists such as the NGSL and NAWL. The results of a pilot study investigating student-created class lists created over the course of an academic year, including effective activities, assessments, and patterns in word choice by students, were also discussed.
3. Vocabulary development and instruction using student-created lists	単	2019年03月11日	Annual Conference of the American Association for Applied Linguistics (ジョージア州 アトランタ市、USA)	In this poster presentation, I discussed what current vocabulary research suggests is beneficial and necessary to include in student-created class vocabulary lists, while explaining a practical approach to their creation and integration with freely available frequency-based lists such as the NGSL and NAWL. The results of a pilot study investigating student-created class lists created over the course of an academic year, including effective activities, assessments, and patterns in word choice by students, were also discussed.
4. Measuring adequacy in L2 production	単	2019年02月03日	21st Annual Temple University Applied Linguistics Colloquium (テンプル大学日本キャンパス大阪センター、大阪府大阪市)	While objective measures of L2 performance (e.g., complexity, accuracy, fluency, and lexis) are well established, the development of sound subjective measures of performance such as communicative and functional adequacy must not be ignored. I discussed the development and validation of a new adequacy scale using a many-facet Rasch analysis.
5. Vocabulary development using student-created lists	単	2018年11月24日	JALT 44th Annual International Conference (静岡コンベンションアーツセンター、静岡県静岡市)	Researchers have argued for the inclusion of explicit vocabulary learning in language programs. Although this can be accomplished in several ways, increasing learner engagement with vocabulary to promote deep learning (Schmitt, 2008) can be challenging for instructors. One remedy is student-created class lists, which promote learner autonomy and increase engagement with vocabulary. In this presentation I demonstrated how to construct computerized, shared class vocabulary lists, and how to utilize them to facilitate vocabulary development in learners.
6. Examining the lexical profile and speaking skills of English L2 learners	単	2018年05月12日	8th Annual Osaka JALT Back to School Conference (大阪女学院大学、大阪府大阪市)	This presentation discussed a pilot study that examined the lexical profile and phrase usage of EFL university students on speaking tests administered in a discussion course. The course aimed to develop the vocabulary and speaking skills of learners through explicit study and instruction of NAWL words and formulaic speech. Results suggest that the program was partially effective, even for learners who were already very proficient speakers.
7. The effect of oral explicit co	単	2018年02月0	20th Annual Temple Un	Studies examining the complexity, accuracy, and

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
Corrective feedback on fluency within an interaction		4日	University Applied Linguistics Colloquium (テンブル大学日本キャンパス大阪センター、大阪府大阪市)	fluency (CAF) of production are abundant in task-based research literature. In addition, several studies have examined the effect of corrective feedback (CF) on CAF. However, studies have traditionally evaluated CAF measures of learners' productions on monologic narrative, opinion, and instructional tasks that do not allow for interaction. Although studies have examined the relationship between CF and the development of CAF, there is a gap for research examining the effect of CF on CAF within an interaction. In this presentation, I discuss a proposal for a study that will investigate the effect of immediate oral explicit corrective feedback on fluency within an interaction, with an aim to bridge the research areas of task performance and CF.
8. Bringing computer literacy development into language instruction	単	2017年06月03日	First Annual Japan Center for Michigan Universities Symposium (ミシガン州立大学連合日本センター、滋賀県彦根市)	Many teachers are surprised to find that their students, many of whom are "digital natives", do not actually have a high degree of computer literacy. Despite their use of modern technology in an almost daily capacity, they lack an understanding of the basics of computing technology and the ability to use computers for advanced problem solving in an efficient way. However, this poses a unique teaching opportunity for language teachers who have a knack for computers, a background in IT, or even a desire to bring computers into the language classroom in a practical context. I discuss collaborative projects and task-based learning activities that can be utilized to simultaneously develop the language proficiency, practical computer-based skills, and computer literacy of learners.
9. Kiva in the classroom	共	2017年05月27日	7th Annual Osaka JALT Back to School Conference (大阪女学院大学、大阪府大阪市)	Imogen Custance & G. Clint Denison Finding ways to motivate students while encouraging greater awareness of global issues is becoming increasingly important in today's global society. This presentation will examine some of the various ways in which micro-lending organizations can be used in class to engage students in philanthropy at a global level whilst also supporting language development.
10. Accurately measuring L2 listening self-efficacy	共	2016年11月27日	JALT 42nd Annual International Conference (愛知県名古屋市)	Brandon Kramer & G. Clint Denison このプレゼンテーションでは、第二言語のリスニング・セルフ・エフィカシーを測るアンケート調査の Mixed-Methods Validationについて論じる。定量分析の結果では、アンケート調査を正確に測定することができ、予想通りに第二言語に対する不安や学習能力との関係を示した。定性分析の結果には、日本の大学生の第二言語のリスニング・セルフ・エフィカシーの原因となるものを強調した。このアンケート調査は日本の大学生の第二言語のリスニング・セルフ・エフィカシーを正確に測ることに加えて、将来の実績を予想すると考えられる。
11. Principled topics for developing writing fluency	単	2016年11月26日	JALT 42nd Annual International Conference (愛知県名古屋市)	試験においても、現実社会においても、第二言語学習者は速く、流暢に様々なトピックについて書く必要がある。しかしながら、今までにライティング活動で使われてきたトピックや、そのトピックとフルエンシーの関係についての研究が足りていないように考えられる。この研究では、どのトピックがライティング・フルエンシーにつながっているのかについて調べた。研究に基づき、どのトピックが評判がよく、書きやすく、文法的に多様性があるという問題について論じる。
12. Developing learners' L2 writing fluency	単	2016年04月23日	6th Annual Osaka JALT Back to School Conference (大阪女学院大学、大阪府大阪市)	時間制限などのプレッシャーがある中で自分のライティングの流暢性を向上させることが難しいと思う学習者が多数いる。しかし、幸運にもスピード・ライティングとトピックを上手く組み合わせればライティング・フルエンシーを向上させることができる。このプレゼンテーションでは、スピード・ライティングのプログラムをどのように授業に取り入れれば良いかや、適切な教材について論じる。
13. Listening self-efficacy for Japanese students: A Rasch-based instrument validation	共	2016年02月07日	18th Annual Temple University Applied Linguistics Colloquium (テンブル大学日本キャンパス東京センター、東京都南麻布)	Brandon Kramer & G. Clint Denison このプレゼンテーションでは、学生 (N=185) の第二言語のリスニング・セルフ・エフィカシーを測るアンケート調査 (16 item) の Rasch Validationについて論じる。結果には、アイテムの困難さの度合いがよく、確率的に Rasch Model の条件に合致し、Unid

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
14. Specifications for a vocabulary achievement test	単	2016年02月07日	18th Annual Temple University Applied Linguistics Colloquium (テンブル大学日本キャンパス東京センター、東京都南麻布)	dimensional Constructにもなった。このアンケート調査は学習者の第二言語のリスニング・セルフ・エフィカシーを精密に測ることに加えて、将来の実績を予想するかもしれない。 このプレゼンテーションでは、語彙テストを作成するためのアイテム・スペシフィケーションを三つ紹介、提供する。このアイテム・スペシフィケーションを基に作成して、行った語彙テストの結果についても論じる。結果として、この語彙テストは他のテスト (e.g., TOEIC、期末テスト) と相互関係を示し、語彙能力を測るのに役立つと考えられる。
15. Comparing Two Secondary School ER Programs	共	2015年11月22日	Extensive Reading Colloquium, JALT 41st Annual International Conference 静岡コンベンションアーツセンター、静岡県静岡市)	G. Clint Denison & Imogen Custance このプレゼンテーションは、二つの高校においての多読 (ER) プログラムについて論じる。一方では必要な語数が決められており、学生が沢山読まなければならない。もう一方では学生が自分のペースで読んで構わないとした。この二つのプログラムを比較すると英語に対する学習意欲が高く、必要な単語数が決められていなくても沢山読む学生がいるとはいえ、相対的に単語数が決められていたプログラムの学生の方が沢山の単語を読んでいるということがわかる。その上、単語数の設定がきっかけになり、ERや読書を積極的に取り組むようになることもある。
16. Narratives topics to develop writing fluency	単	2015年05月16日	14th JALT PanSIG Conference (神戸市外国語大学、兵庫県神戸市)	時間制限などのプレッシャーがある中で自分のライティングの流暢性を向上させることが難しいと思う学習者が多数いる。そのため、授業でライティング・フルエンシーを発達させる必要があると考える。ナラティブ・トピックとスピード・ライティングの組み合わせによって学生が教師とコミュニケーションをとる機会が増え、ライティング・フルエンシーを向上させることができる。このプレゼンテーションでは、一年間を通して高校の授業で活用したスピード・ライティング活動とその活動で用いたトピックについて論じる。また、結果として流暢性の向上 (WPM) が見られた。
17. Conjunction-based sentence combining to develop complexity in fluent writing	単	2015年02月08日	17th Annual Temple University Applied Linguistics Colloquium (テンブル大学日本キャンパス大阪センター、大阪府大阪市)	外国語としての英語教育を数年間受けていても、複雑な文章が書けない学習者が多く存在し、さらに早く書こうとする際に短い文章や同じ文章を何度も繰り返すことで複雑な文章が書けていないという状況がある。この研究ではライティングの複雑性を増すセンテンス・コンパニングという活動について調べた。高校1年のスーパーイングリッシュコース (N=53) の授業でセンテンス・コンパニングの練習問題を順にやり、その結果対象者のライティングの複雑性 (MLS, CPS) が上がった。その上、ライティングの速度 (フルエンシー) にも微増が見られ、その研究結果やセンテンス・コンパニングの練習問題について論じる。
18. Fluency development through extensive writing	単	2014年02月09日	16th Annual Temple University Applied Linguistics Colloquium (テンブル大学日本キャンパス大阪センター、大阪府大阪市)	この論文では、中学校3年のスーパーイングリッシュコース (N=78) に取り組んだエクステンシブ・ライティング (多書) という活動について論じる。学生が自分のライティングの正確さに集中し過ぎ、長文が書けないという問題は珍しくない。その問題が解決できるようにエクステンシブ・ライティングを授業に導入した。学生がトピックを選び、7分間できるだけ速く長く書き続け、終わったら自分のチャートに記録し流暢性 (フルエンシー) を向上するように試みた。研究の結果として、学生のライティング速度が徐々に上がったのを見られた。その上、エクステンシブ・ライティングがライティング・フルエンシーの向上やライティングに対する取り組み易さの向上には効率的な活動の一つであるかもしれない。
19. 英語活動ってどういうの (Do you know)?	共	2008年10月17日	文部科学省指定小学校国際理解教育研究発表会シンポジウム (兵庫県篠山市立岡野小学校)	吉田達弘、藤田聖子、G. Clint Denison、石田靖、& 安井健二 小学校で「外国語活動」が必修科目になり、初めて英語を教える小学校の先生が増えている。生徒が英語が好きになるように、どのように先生が英語を教えればよいかという問題について考える。
<b>3. 総説</b>				
1. Recent research in extensive reading	共	2019年10月	Extensive Reading in Japan, 12(2). 24-27.	Imogen Custance and G. Clint Denison エクステンシブリーディング (多読) とエクステンシブリスニング (多聞) に関連するトピックおよび最新の研究のレビュー。
2. Recent research in extensive reading and listening	共	2018年11月	Extensive Reading in Japan, 11(2). 25-27.	Imogen Custance and G. Clint Denison エクステンシブリーディング (多読) とエクステンシブリスニング (多聞) に関連するトピックおよび最新の研究のレビュー。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3. 総説</b>				
3. MWU.jpを通して自主的な語彙学習	単	2018年07月	武庫川女子大学・同短期大学共通教育ニュース、Vol.10、No.1	この記事では、 <u>グーグル・クラスルーム</u> を活用した語彙学習へのアプローチを紹介する。学生は共有スプレッドシートにアクセスし、クラスリストを作成するために自分で単語を選択し、リストに追加する。このリストは、自律学習を促進するために活動やクイズでの使用ができる。
4. Recent research in extensive reading and listening	共	2018年07月	Extensive Reading in Japan, 11(1), 21-24.	Imogen Custance and <u>G. Clint Denison</u> エクステンシブリーディング (多読) とエクステンシブリスニング (多聞) に関連するトピックおよび最新の研究のレビュー。
5. Recent research in extensive reading	単	2017年11月	Extensive Reading in Japan, 10(2), 24-27.	エクステンシブリーディング (多読) とエクステンシブリスニング (多聞) に関連するトピックおよび最新の研究のレビュー。
6. Recent research in extensive reading and listening	単	2017年05月	Extensive Reading in Japan, 10(1), 20-23.	エクステンシブリーディング (多読) とエクステンシブリスニング (多聞) に関連するトピックおよび最新の研究のレビュー。
7. Recent research in extensive reading and listening	単	2016年09月	Extensive Reading in Japan, 9(2), 22-25.	エクステンシブリーディング (多読) とエクステンシブリスニング (多聞) に関連するトピックおよび最新の研究のレビュー。
8. Recent research in extensive reading	単	2016年06月	Extensive Reading in Japan, 9(1), 20-23.	エクステンシブリーディング (多読) とエクステンシブリスニング (多聞) に関連するトピックおよび最新の研究のレビュー。
9. インタビューを通して英語への興味を深める	単	2009年11月	兵庫教育、第61巻、第8号、46-49頁	この論文では、英語能力を鍛えながら英語に対しての興味を深める、小学校で活用できる様々なインタビュー活動を紹介します。初めて英語を教える小学校の先生を対象とし、使いやすく、変更しやすいLESSンプランを提供する。
<b>4. 芸術 (建築模型等含む) ・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. Vocab@Tokyo: Current trends in vocabulary studies	共	2016年09月	Meiji Gakuin University and the JALT Vocabulary SIG	編著 Brandon Kramer, Imogen Custance, <u>Clint Denison</u> , & Steve Porritt. The guidebook for the Vocab@Tokyo conference held in Tokyo, Japan from September 12-14, 2016. In addition to crucial conference information, the guidebook contains a variety of extended abstracts from presentations and papers that were discussed at the conference, making it a valuable resource for researching vocabulary learning and instruction.
2. Activities for teaching pronunciation to Japanese learners of English	共	2016年04月	Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 105.	編著 <u>G. Clint Denison</u> , Nicole Furuya, Samuel Sorenson, & Eddy Tang. この論文集では、英語を勉強する日本人のための発音練習のオリジナル教材や活動のアイデアを提供する。英語のセグメンタルやスプラセグメンタル特徴の練習ができる活動も含まれている。日本人や日本の学校のために作られた教材であるが、様々な状況に応じて活用できると考えられる。
3. Individual differences in second language acquisition	共	2014年08月	Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 94.	編著 Natalie Barbieri, Kate St. Hilaire, & <u>G. Clint Denison</u> . この論文集では、多様な文化的背景と言語習得のレベルの異なる学習者に対し、教師が活用できる様々なアイデアや活動を提供している。学習者の違い (Individual Differences) として、モチベーション、アイデンティティ、セルフ・コンセプト、第二言語への不安、学習スタイル、他者と対話する意思、性別等についての研究を紹介する。
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 英語教授法 (TEFL) 取得支援補助金	単	2012年01月	自治体国際化協会 (CLAIR・クレア)	A competitive grant from the Council of Local Authorities for International Relations (CLAIR) to aid in the completion of a TEFL certification course.

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2018年3月～現在	JALT Testing & Evaluation SIG
2. 2018年12月～現在	American Association for Applied Linguistics (米国応用言語学会)
3. 2013年12月～2015年12月	JALT Computer Assisted Language Learning SIG
4. 2013年12月～現在	JALT Extensive Reading SIG
5. 2013年12月～現在	Japan Association for Language Teaching (全国語学教育学会)
6. 2013年12月～現在	JALT Vocabulary SIG